

山形村埋蔵文化財調査年報

(平成 9 年度 国庫補助事業)

淀の内遺跡 第 2 次調査

中町立道西遺跡 第 1 次調査試掘

洞遺跡 第 3 次調査（試掘）

下耕地遺跡 第 2 次調査（試掘）

1998

長野県山形村教育委員会

はじめに

村民憲章に謳われるよう、山形村は豊かな自然と肥沃な大地に抱かれ、長い歴史と先人の英知によって築かれた教育と文化の伝統ある村であります。村内ではその恵まれた条件を生かした農作物が盛んに栽培される一方で、生活環境の近代化も土地利用計画に基づき、自然との調和を図りながら進められています。わたくしたちの生活を進歩させるうえで重要な開発も、時として今日の山形村を築き上げた先人達の生活が刻み込まれた遺跡の上にも及ぶことがあります。遺跡、埋蔵文化財の保護は歴史・文化的の正しい理解に欠かすことのできないものであり、貴重な文化遺産を無造作に破壊することがあってはなりません。

本報告書は、平成9年度に国庫補助をうけて開発行為に先立ち実施された埋蔵文化財発掘調査の記録であります。我が村の歴史・文化の理解に少しでもお役に立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施及び報告書の作成にあたり、関係各位の御協力と御指導を賜りましたことに対し心から感謝申し上げます。

平成10年3月

山形村教育長 上條光男

例　　言

1 本報告書は、開発事業における事前の埋蔵文化財試掘確認調査及び、個人開発における事前の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2 発掘調査は山形村教育委員会において実施し、発掘作業・遺物整理にあたっては下記の方々の御協力を得た。記して謝意を表する。(敬称略、50音順)

太田義一 大塚恭子 小野邦美 小野圭子 上條忠昭 上條信義
上條賢恵 小林弥寿枝 直井由加里 中村文夫 百瀬時雄 八板千佳

3 本書の執筆・編集は和田が行った。なお、現地調査及び出土遺物について下記の方々から有益な御教示、御指導を賜った。記して厚くお礼申し上げる次第である。(敬称略、順不同)

樋口昇一 直井雅尚 平林彰 小口達志 竹原学 藤森英二

目　　次

はじめに　例　　言　　目　　次

淀の内遺跡 第2次調査	2
中町立道西遺跡 第1次調査試掘	23
洞遺跡 第3次調査(試掘)	26
下耕地遺跡 第2次調査(試掘)	27
写真図版	

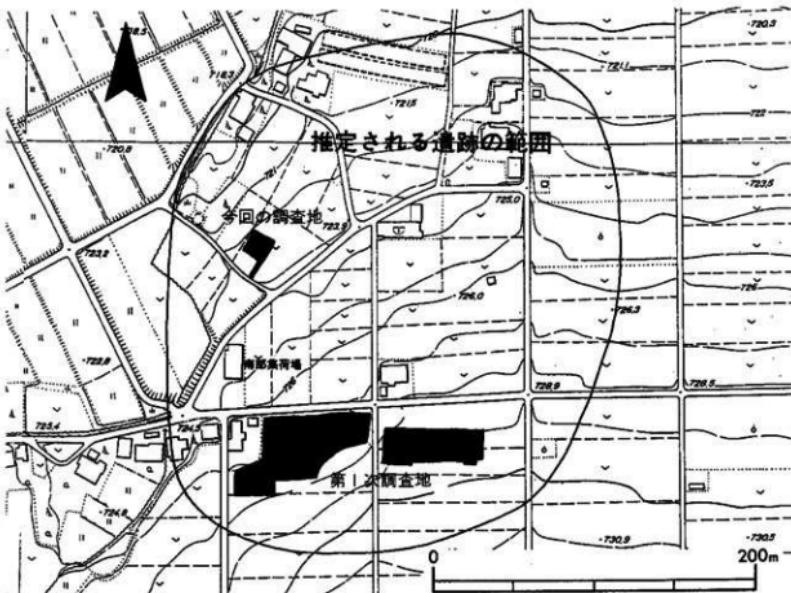
淀の内遺跡 第2次調査

対象地 長野県東筑摩郡山形村468-1
調査期間 平成9年9月1日～平成9年10月8日
開発対象面積 500m²
発掘面積 280m²
調査原因 個人宅地開発事業

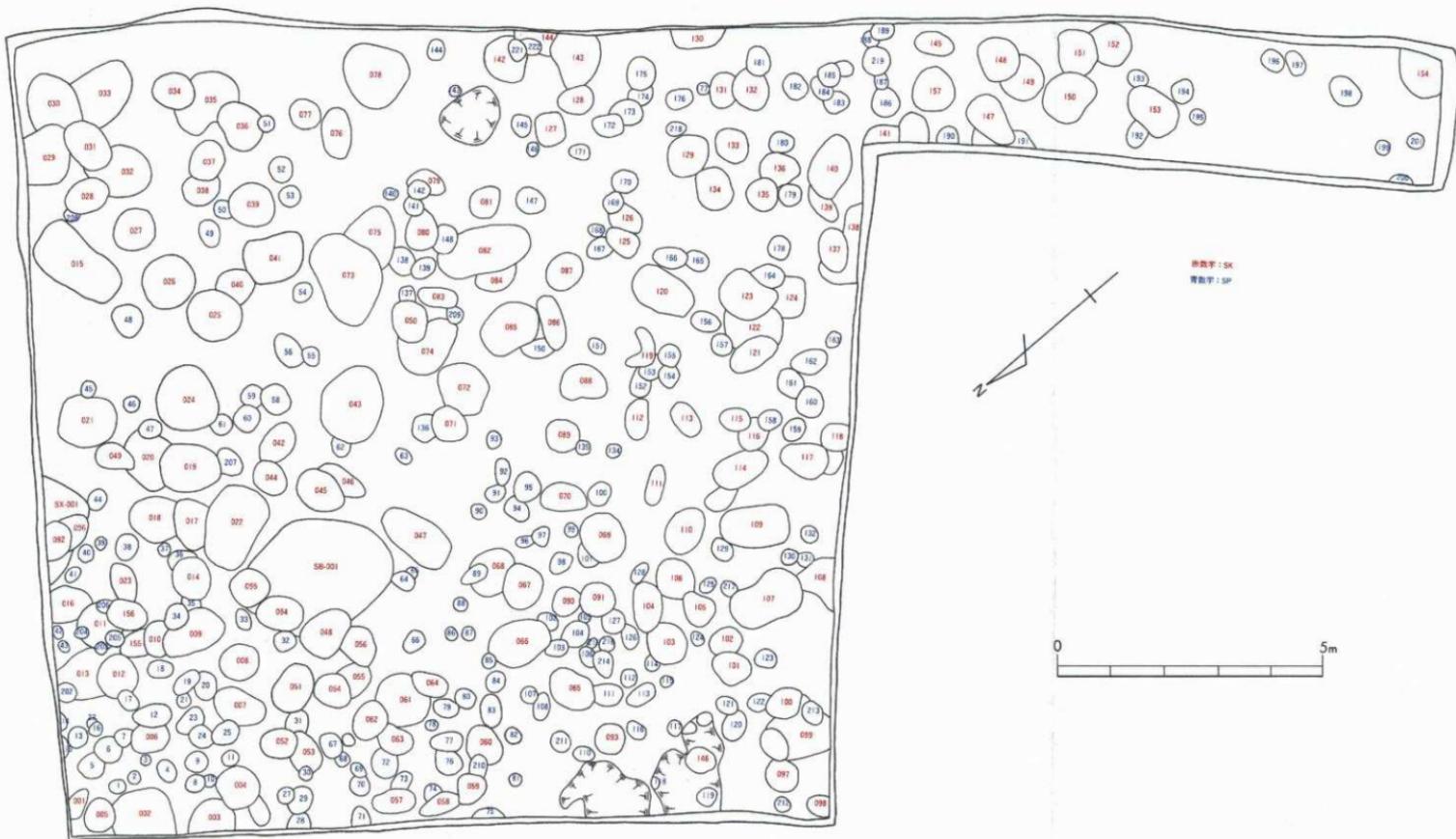
1はじめに

上大池区洞地籍の湧水を源とする小河川沿いには、洞遺跡、下耕地遺跡、淀の内遺跡、野際遺跡など縄文時代中期の遺跡が知られている。その中でも本遺跡は、平成4年に住宅団地開発事業に伴う第1次調査によって縄文時代中期後半を主体とする環状集落跡であることが判明していた。

今回は第1次調査区から北へ100m程離れた畠地の一角で個人宅地開発が計画されたため、記録保存を目的とし、環状集落が北側へ広がっていることを推測して発掘調査を実施した。調査区は建物と上下水道管が埋設される予定地を覆う形で設定した。



第1図 淀の内遺跡全体図 (S=1/3,000)



第2図 淀の内遺跡第2次調査 遺構全体図 (S-1/60)

2 調査の結果

調査地は、約40cmの耕作土を除去すると次山のローム層に至る。表土除去は重機によってこのローム層の上面までを行い、人力によって遺構検出、掘り下げ作業を行った。また長芋が栽培されていたため、調査区の全域にわたって幅15cmの溝が1m間隔で掘られ搅乱されていた。なお、調査にあたっては煩雑になるためこの搅乱の掘削は行っておらず、遺構図に場所を記入するにとどめた。本報告書の遺構図には必要な部分についてのみ表現してある。

1) 検出された遺構

I 住居址

今回の調査区には、第1次調査で検出された環状集落の北側が及ぶのではないかと推測していたが、住居址は1件しか発見されず、環状集落の規模がやや狭まることが分かった。

● SB-001

調査区の北寄りに位置し、北側でSK-048・094・095に切られ、SP-064を切る。覆土は2層に分けることができたが、最深部でも15cm程しか残しておらず遺存状態は良くない。床はローム層を掘り込みそのまま床面としているが、踏み締められた痕跡もなく軟弱である。炉は住居址の北東にやや寄って設置されている。細長の石を4つ組み合わせた1辺60cm余の方形石囲い炉であったと思われるが、南東の1石は搅乱によって残存していないかった。ピットは南側に6つ確認され、P1のみが深さ50cmと深いが、他は10cm前後と浅く上屋構造を推測することはできない。床面に接する形で曾利IV式の深鉢（第6図13）が出土しているが遺物の量は少ない。プランは不整梢円形で2.6m×2.2mを測るが、かなり小さな住居址の印象を受ける。

II 土壙・ピット

調査区の全域にわたって土壙157基、ピット221基が検出された。その大半は遺物の出土が見られないか小片であるため帰属時期の決定をできないが、出土した土器は縄文時代中期初頭のものが多く2、3を除いては縄文時代中期の範疇に入るため、おおむねがこの時期と思われる。報告書作成にあたっては、数が多いためすべてを図示・記述することは困難なため、埋設土器が見られたもの、礫の出土を見たもの等特徴的なもののみを抽出し、その他については一覧表に規模・形状・出土遺物・時期などを掲示することとした。また、検出された土壙・ピットの性格については、決定的な証拠を残すものが僅少であるため十分な分析にまで至ることができていない。以下いくつかの土壙について見ていくたい。

● SK-007

100cm×67cmをかり、東側は2段に40cm余掘り込まれている。底から10cm前後浮いた位置から重なるような状況で土器（第6図1～3）・磨製石斧（第9図17）が出土したが、完形の土器はなく、絶てが破片資料であるため投げ込まれた遺物と考えられる。時期は出土した土器から縄文中期中葉新道式期に帰属するものと考えられる。

● SK-011

123cm×107cm×14cmをかり隅丸方形状を呈する。横倒しの形で中期初頭梨久保式I段階の深鉢（第

6図4)が出土した。土器の底部はSP-205に切られ残存していない。

④ SK-022

153cm×105cm×30cmで、北側は2段に5cm程掘り込まれている。中央部より拳大～人頭大の石が10個程、底に接する形でまとまって出土した。石の間からは土器片が5点(第6図9、第9図7～9)出土したが土壤の性格は分からぬ。中期初頭梨久保式に帰属するものと考えられる。

④ SK-031

98cm×69cm×50cmをはかり、橢円形状を呈する。西壁寄りに完形の浅鉢(第6図5)が逆位で出土した状況から見て壺接葬墓と考えられる。浅鉢内の土は黒色で、耳飾などの装飾品は見られなかった。また、浅鉢内面には朱の塗布が認められた。時期は繩文後期に帰属すると考えられる。

④ SK-035

調査区の東端に位置し、132cm×115cm×40cmをはかる。SK-034・036に切られてはいるものの、今回の調査で唯一明瞭な柱痕が認められた遺構である。柱痕の直径は35cm程度で、柱が抜き取られた痕跡は断面観察から認められなかつたので柱の直径も同程度と思われる。また意識して掘り下げてはいなければ、土器片(第9図12～16)は壁に寄った位置から出土したので、柱が立てられた時期は梨久保式を測らないと考えられる。

④ SK-134

75cm×60cm×45cmをはかり橢円形状で、断面は袋状を呈する。覆土は6層に分けることができたが不自然な埋没状況で、2層はロームブロックが見られないのに対し、3層・4層を中心にロームブロックが見られ、人為的な埋め戻しがされた状況を伺える。また断面形状から、貯蔵穴としての機能を考えるため、2層が貯蔵されたものと解釈して良いのだろうか。時期は出土土器から中期初頭梨久保式期と思われる。なお、袋状を呈する土壤としてSK-129・133がある。

④ SK-145

61cm×45cm×34cmをはかり、南東側が張り出す不整円形をなす。北西壁に沿う形で土器片(第7図16)が出土した。時期は梨久保式II段階のものである。

④ SK-150

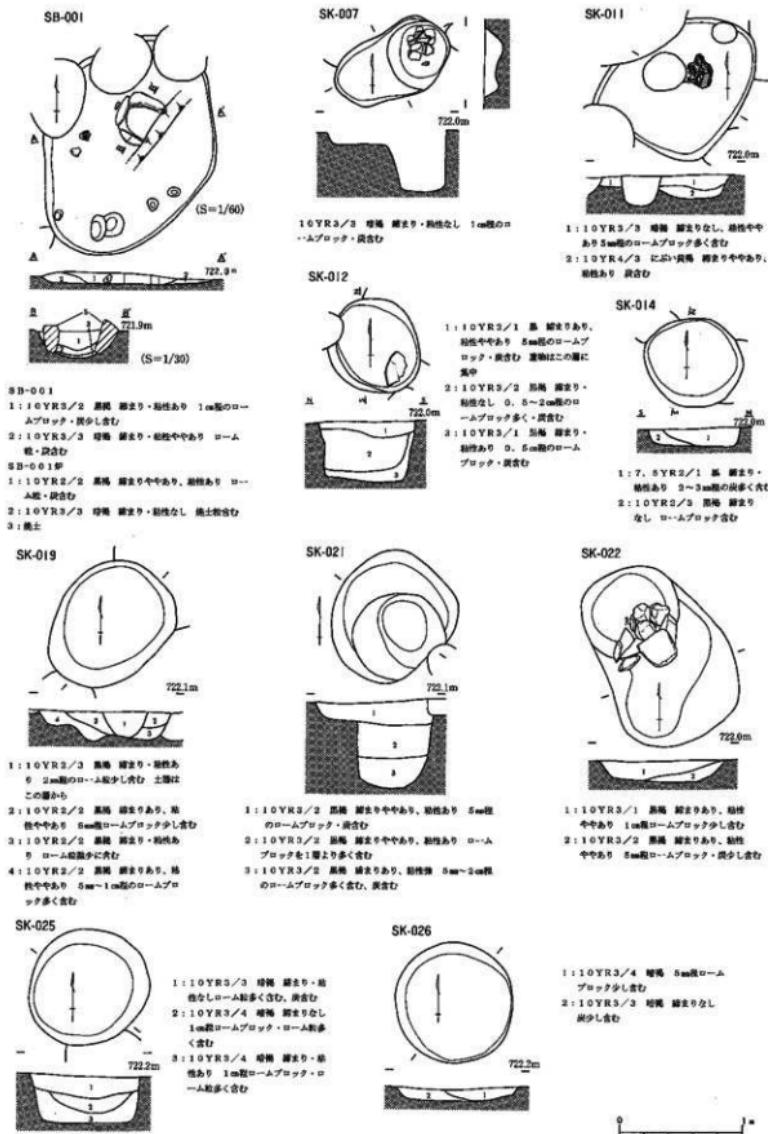
103cm×90cm×16cmをはかり、南西隅に深さ15cmのピットを有す。土器の出土は見られなかつたが、2つに割られた磨石が床面より4cm余浮いた状況で離れて出土した。覆土は単層でロームブロックが多く見られたため一度に埋め戻された状況を伺える。磨石を埋設した祭祀的土壤と思われる。

④ SP-084

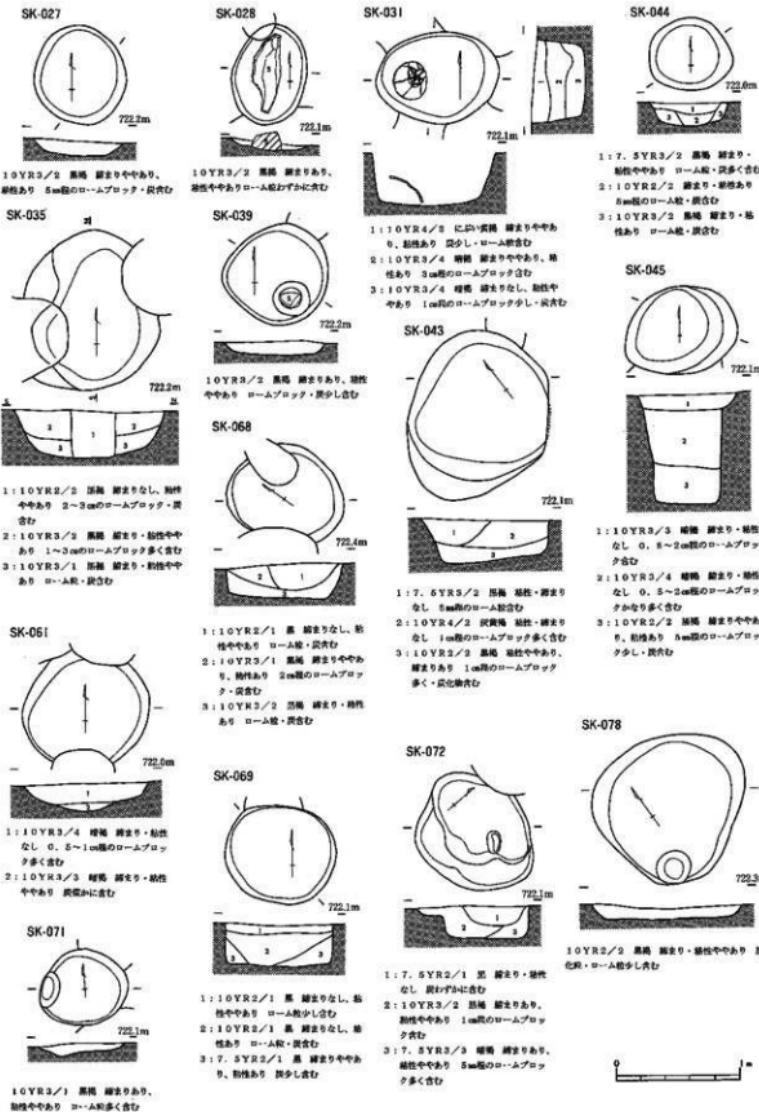
直径40cm、深さ36cmをはかり、礫や土器片(第7図20)、磨製石斧(第9図18)が出土したが、完形品が見られないので礫と同時に投げ込まれた遺物と考えられる。なお、同じ状況を呈する遺構として、SP-100・165がある。

④ SP-073

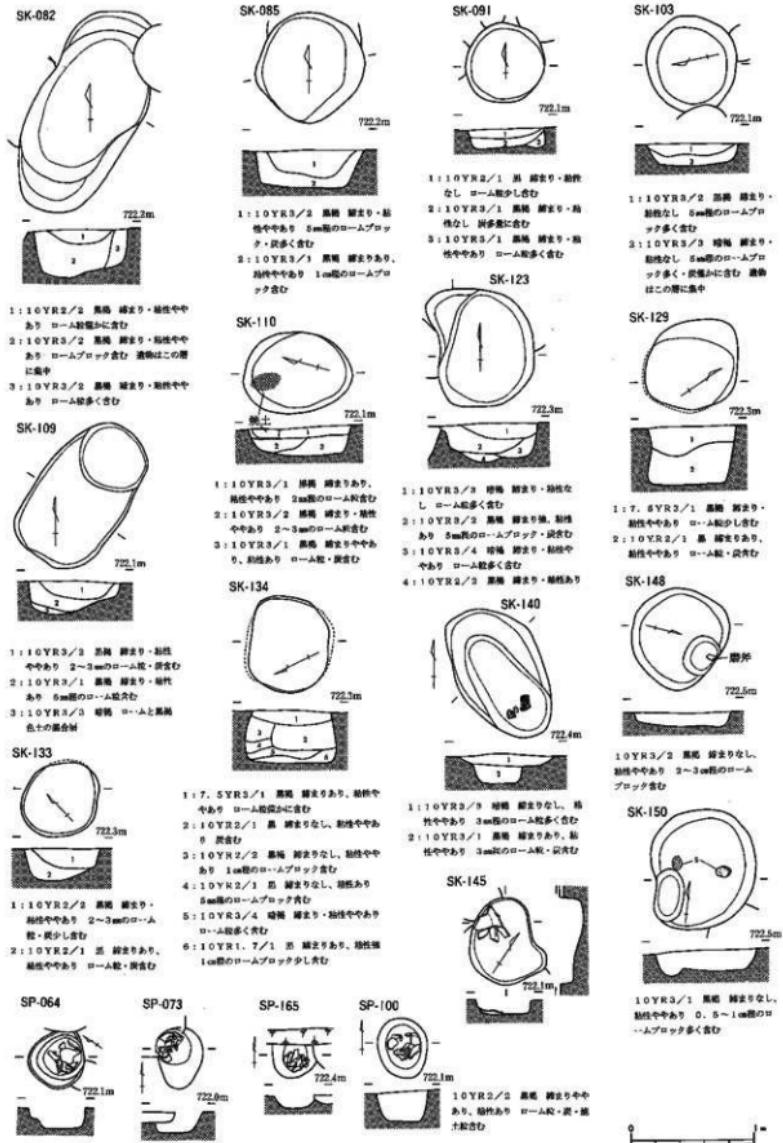
調査区の西隅に位置し、51cm×37cm×35cmをはかる。深鉢(第7図17)を正位に埋設した遺構と考えられるが、SK-057に切られた際、口縁部を3/4程失っていた。時期は中期中葉藤内II式に帰属するものと思われる。



第3図 住居址・土壤(1)



第4図 土 壢 (2)



第5図 土 壤 (3)

淀の内遺跡検出構査一覧表

探査番号	地図	経度	緯度	探査方法	検出状況	検出位置	検出状況
-005	58	35	26	機円形	e	>SK-065	石3・5 不明
-006	59	35	29			<SK-064	石3 不明
-007	59	35	27			<SK-063	石4 植物1
-008	79	79	44	円形	e	<SP-168 >SK-063	石3・2 植久屋日
-009	65	57	43	円形	e	<SK-063	石3 不明
-010	73	57	43			<SP-097 >SP-012	植久屋1 不明
-011	109	67	45	機円形	e	>SP-020-025	石3・石1.2 新造式
-012	74	67	44	円形	e	<SK-010, SF-058-060 >SF-034	古戸既出日
-013	232	397	14	機円形	a	<SK-025 >SP-060-061	石久屋日
-014	83	25	47	円形	d	<SK-013 >SP-017	3.9 植生既出(植物水2)
-015	91	14				>SK-011-012, SF-292-293	石3 不明
-016	92	74	17	円形	a	<SP-025-036	石3・4 植久屋1
-017	176	109	20	機円形	a		
-018	64	26				>SK-011	不明
-019	55	16				<SK-018 >SK-002	
-020	87	36				>SK-017	不明 不明
-021	132	26	18	機円形	a	<SK-018 >SP-207	不明
-022	65	15				<SK-018-040, SF-047	植久屋日
-023	196	62	48	機円形	e	>SP-045	石3.5 不明
-024	152	105	30	機円形	e	<SK-017	9.、施7?~9 植久屋
-025	47	32				>SK-016	石1.0 不明
-026	131	113	36	円形	a	<SP-041	
-027	190	94	40	円形	c	<SK-040	
-028	101	98	13	円形	a		
-029	83	93	13	円形	a		
-030	84	62	16	機円形	a	<SK-022 >SP-208	植久屋 不明
-031	186	27				<SK-030 >SK-033	
-032	94	23				<SK-033 >SK-030-039	石3 不明
-033	96	69	59	機円形	c	<SK-029-030-032-033	5 既生既出
-034	98	21				>SK-038-031	石1.1 植久屋
-035	100	51				>SK-030-033	不明
-036	77	65	68	円形	e	<SK-035	不明 不明
-037	122	112	60	円形	b	>SP-034-038	石1.3~1.6 植久屋1
-038	83	79	14	不規則形	a	<SK-033 >SP-051	
-039	79	76	17	円形	a	<SK-036	
-040	74	14				>SK-037	
-041	96	89	22	円形	b	>SP-056	1.9 植久屋1
-042	67	9				>SK-035-043	
-043	113	85	53	双円形	e	<SK-046	
-044	84	26	28	機円形	e	>SP-044	植久屋1
-045	123	124	52	機円形	e	>SP-045	石3 不明
-046	79	56	34	機円形	a	<SK-043	石3 不明
-047	94	72	87	機円形	f	<SK-046	植久屋1
-048	99	10				>SK-045	
-049	143	71	26	機円形	b		石4 不明
-050	96	77	17	機円形	a	<SK-056 <>SB-061	不明
-051	72	48	26	機円形	c	<SK-050	不明
-052	85	25	20	円形	a	<SK-074, SF-137	
-053	82	25	30	機円形	a		
-054	68	54	35	機円形	c	<SK-053, SF-051	植久屋1
-055	58	38	39	機円形	a	<SP-051 >SK-052, SF-050	
-056	69	89	30	円形	e	<SK-056	不明
-057	63	63	15	機円形	a	>SK-054-056	
-058	79	47	17	機円形	a	<SK-055 >SK-048	不明
-059	79	47	16	機円形	c	<SP-073	
-060	79	47	15	機円形	c	<SP-074	不明
-061	79	47	14	機円形	a	<SK-057	
-062	79	47	13	機円形	a	<SK-057, SF-089	不明
-063	94	59	22	円形	a	>SK-061-063-064	植久屋1
-064	77	59	19	機円形	b	<SK-061-062	不明
-065	48	39				<SK-061, SF-072 >SK-062	石内1
-066	73	45	29	機円形	b	<SK-063	
-067	95	65	32	機円形	e	<SP-111	1.4 不明
-068	120	26	14	機円形	a	<SP-146, >SP-048	不明
-069	85	73	14	円形	a	<SP-146	不明
-070	79	37	13	機円形	a	<SK-067, SF-089	不明
-071	82	85	39	円形	c	<SP-151	石1.5~1.7 石既出
-072	79	56	22	不規則形	b		
-073	72	62	8	円形	b	<SK-072, SF-136	石2.5 不明
-074	95	93	33	円形	e	>SK-071	石2.1~2.3 石内1
-075	175	113	45	双円形	b	<SK-073	不明
-076	127	35				>SK-066, <>SP-209	既出
-077	95	36	21			<SP-138 >SK-073	
-078	85	65	24	機円形	c		
-079	63	55	18	円形	b		
-080	128	118	24	円形	b		石2.8 新造式(大塗山山)
-081	74	45	9	機円形	a	>SP-142	石2.4 植久屋1
-082	67	47	28	円形	e	<SP-145 >SP-141	石内1
-083	65	58	17	円形	a		
-084	160	80	6	機円形	b	<SK-084 >SP-148	石2.5~3.6 植久屋
-085	24	35	29	機円形	e	<SP-149 >SP-147	
-086	48	11	13			<SP-148	
-087	115	93	8	機円形	b	<SP-150	
-088	106	43	33	機円形	a	<SP-151	
-089	73	61	15	円形	a		
-090	88	59	40	機円形	e		不明
-091	64	60	22	円形	e	<SP-135	植久屋
-092	66	54	24	円形	c	>SK-081	
-093	66	65	18	円形	a	<SK-080, SF-105-127	石2.2~3.4 植久屋
-094	25	71	11			<SK-086, SK-081	
-095	59	98	05	円形	b		
-096	85	64	62		e		不明
-097	66	65	37		e		不明
-098	35	21			<SK-084 >SK-082		

品番番号	品目	品名	尺寸	中継地點	西運地點	出荷地(販路)・販路(販路名)	取扱業者名	取扱業者仕向	特記
SP-038	56	46	16					Z12	■■■
-039	34	23	29						
-040	35	28	26						
-041	32	22	19						
-042	29	18	19						
-043	24	18	12						
-044	41	32	38			>SK-083			不明
-045	33	29	12			<SK-021			
-046	30	30	25						
-047	43	34	28			<SK-080			
-048	60	54	46						
-049	20	27	19						
-050	32	21	13			>SK-089			
-051	34	26	22			<SK-036			
-052	47	47	26						
-053	48	36	31					■■■	■■■
-054	49	34	22			<SP-056			■■■
-055	37	32	21			>SP-055			不明
-056	70	49	22						
-057									
-058	55	50	30			<SP-059			
-059	43	41	43			>SP-058-060			
-060	51	47	32			<SP-059			不明
-061	45		24			>SK-024			
-062		34				>SK-043			不明
-063	33	35	17						
-064	46	35	36			<SP-065 >SR-061		2.0、台1.8	■■■
-065	23	19				>SP-064			
-066	46	35	35						
-067	50	49	15			<SP-068			■■■
-068	39	38	16			>SP-067		2.1	■■■
-069	35	35	8			<SP-070			
-070		37	24			>SP-069			
-071		35	35						
-072	57	48				>SK-063			不明
-073	61	37	30			>SK-067		1.7	■■■
-074		32				>SK-068			
-075		15							
-076	37	45	31			>SP-077		1.9	■■■
-077	66	36	22			<SP-076			■■■
-078	24	19	14						
-079	50	35	13						
-080	37	35	27						
-081	28	24	18						
-082	42	35	25						
-083	61	45	22						
-084	42	35	19						
-085	28	27	8			<SK-086			■■■
-086	27	22	20					2.3	■■■
-087	25	23	22						
-088	27	25	11						
-089	54	36	33			<SK-068		台1.2、台6.1	■■■
-090	29	25	26						
-091	43	39	9			>SP-090			
-092	53	39	13			<SP-091			不明
-093	39	37	33						
-094	59	38	20			>SP-095		■■■ 2	■■■
-095	56	51	19			<SP-094		■■■ 3	■■■
-096		21	21			>SP-097			
-097	27	33	12			<SP-096			
-098	66	56	27						
-099		24	5						
-100	50	46	29					2.4～2.6	■■■
-101		19				>SK-069			
-102	39	30	6			>SK-066			
-103	43	35	8			<SP-104 >SK-066			
-104	59	43	25			<SP-105 >SP-103			不明
-105	20	20				>SK-061, SP-104			
-106	45	28	10			>SP-106			
-107	36	35	12			<SP-108			
-108	54	33	7			>SP-107			
-109									
-110	43	30	24			>SK-068			
-111		40	35						
-112	35	31	17						
-113	67	34	34						
-114		35	18			>SK-105			
-115	25	27	22						
-116	36	38	21						
-117	36	27	24			>SP-106			
-118	36	16	55						
-119	55	32	41						
-120	59	43				>SP-121			
-121	43	35	26			<SP-120			不明
-122		36	29			>SK-106			
-123	45	37	28						
-124	27	33	19						
-125	36	33	21						
-126	44	32	14			>SP-127			不明
-127		44	22			<SP-126 >SK-061			
-128	42	25	9			>SK-109			
-129	56	38	10						
-130									
-131		27	18			>SP-128			
-132	34	32	16						
-133		49	34						
-134	30	38	32						
-135	36	36	9			<SK-089		■■■ 4	■■■

— 凡 例 —

* SK（土壌）、SP（ビット）、SX（不明）の基準は現場で見た日の判断をしており、厳密な区別ではない。また、平面形状と新舊地との分類はSK（土壌）のみ行った。分類は阿久遠謹（長野県中央道埋蔵文化財調査報告書）原村その5）を参考にした。

・平面形状 - 円形(周長と直径の比が1:1.2以下)、橢円形(周長と直径の比が1:1.2以上)、或円形(円形のままで角があった形)、扇形、不規則形

・断面形状 - a. 深さと長径の比が1:3以上で、浅く前面部が方形又は近似形のもの。b. 深さと長径の比が1:3以上で、前面が丸みを持つ等のもの。c. 深さと長径の比が1:3~1:

1で、断面形が方錐又は連合形のもの。d. 面積と長径の比が $1:1.5$ ～ $1:2$ で、断面が丸形を持つ等と以外のもの。e. 面積と長径の比が $1:3$ ～ $1:4$ で、底辺が2段のものやビードを持つもの。

¹⁰ 第一章が「最も興味深い」ことから、正確な統計的説明を用いていたのもある。問題は測定の出力となる。不規則な時間帯に測定する連続的なデータ集である。

第一 図示した工具を測定していくが、正確な測定の時間をかいておいた方がいい。測定は測定が完工後、十分な時間をおいて測定する場合は必ずしも

2) 出土遺物

I 土器 (第6、7、9~11図)

今回の調査では整理用コンテナ8箱分の土器が出土している。その時期は縄文時代前期末~後期、弥生時代後期の遺物が出土しているが、そのおおくは縄文時代中期初頭のものである。以下、時期毎に見ていきたい。

① 縄文時代前期末

3片の出土で数は少ない。拓59は半裁竹管による沈線区画結節文が渦巻状に施文されたものである。拓20は縄文地文の上に結節浮線文と素浮線文が貼付されたもので、胎土は外見上在地のものと変わらないが、畿内の大歳山式に類似する。また拓55は、口縁部に肥厚帯を設けその上を指頭押圧し、それ以下は縄文が施文される。口縁部に肥厚帯が設けられる土器はその下側に三角印刻文を入れるものが多く見られるが、やや様相が異なる。一応前期末に位置づけた。

② 縄文時代中期初頭

今回の調査で最も多く出土したのがこの時期の土器である。この時期の土器は三上徹也氏の研究成果に基づき、纏文系、沈線文系、縄文系と沈線文系が折衷したものに分類され、時間差としてI・II段階に分けている。また、外来系と思われるのも僅かに存在するので、これは別に見ていきたい。

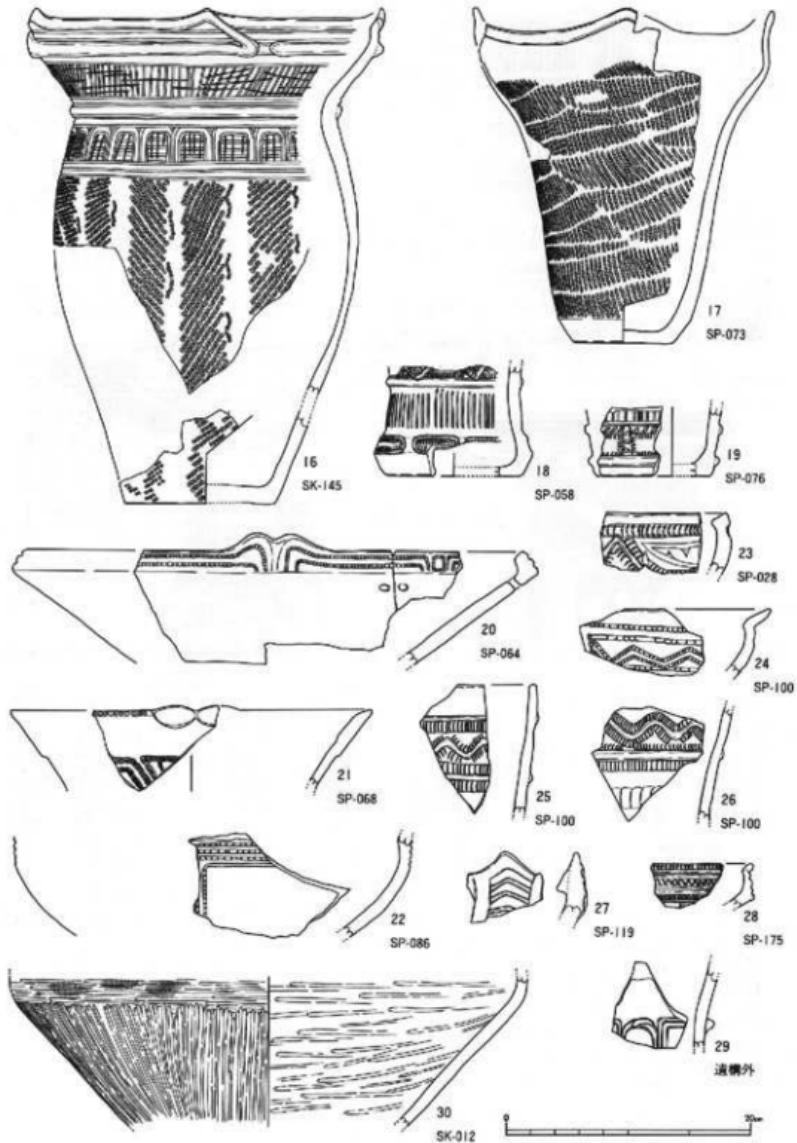
纏文系 いわゆる纏文系と呼ぶ土器で、第6図9・10、拓62はまさしく口縁部に纏線文をもつ。また口縁部が縄文施文のものとして拓1・15がある。拓16・43は胸部の破片で空白部を持つ結節羽状縄文が施文されている。これに対し、拓2・6・24・30も縄文施文の胸部破片であるが空白部がみられない。前者はI段階、後者はII段階とされている。拓32・44には「Y」字状文が見られI段階の特徴とされている。拓54・61には縄文地文に半裁竹管沈線による「B」字状文が見られ、拓57・58・63には縦位に垂下する隆線文・沈線文と縄文が見られるが、両者ともII段階になると思われる。

沈線文系 半裁竹管状工具による沈線文を特徴とするもので、縄文施文がないものを扱う。28、拓5・25・29・33・45は「く」字状に内折する口縁部の破片で、口唇部は爪形文が連続施文され、屈曲部までの間には格子目文が見られる。この屈曲部から頸部までに該当する破片は拓12・26・34・46であるが、間隔を置いた縦位平行沈線（拓34）と間隔を持たない（拓12・26・46）ものがある。なお拓12は沈線文の上から円形の刺突がされており前期末の文様要素が伺える。頸部以下胸部のものとして縦位沈線施文の拓4、幾何学的文様が見られる拓11、「匚」状に区画されたもの（拓28・39・41）、格子目文の見られるもの（拓18・48・60）などがある。

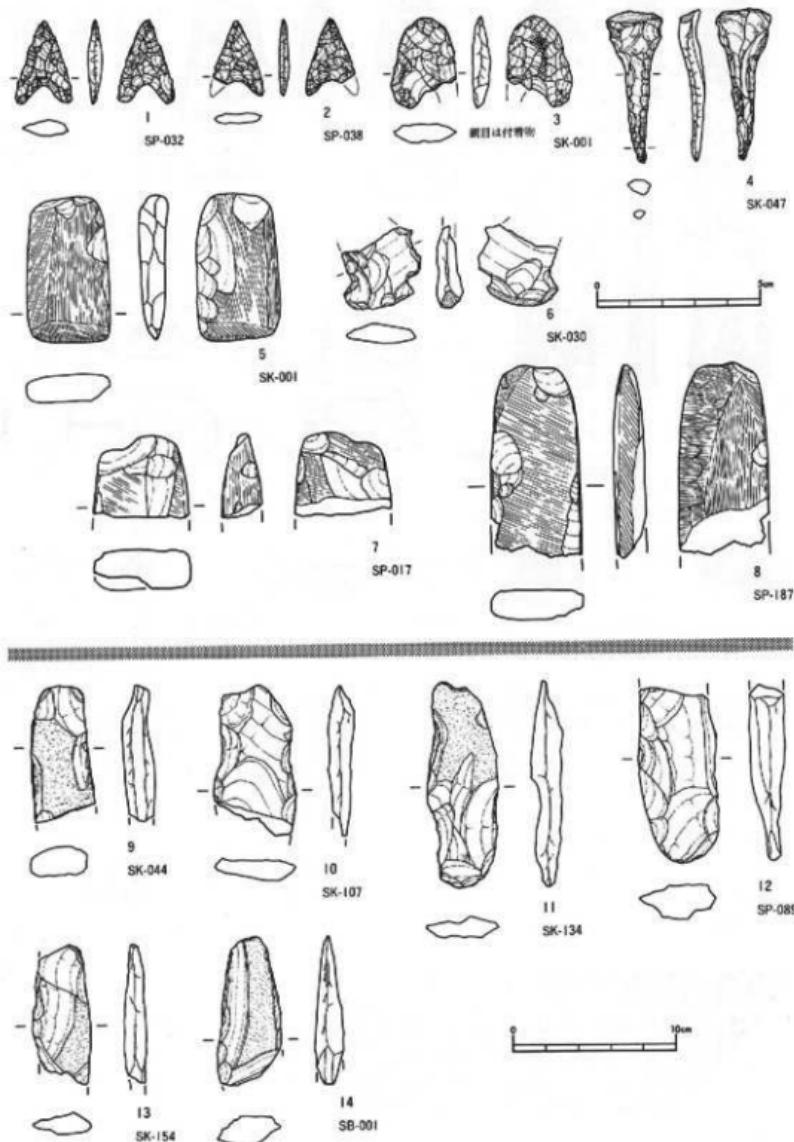
縄文系と沈線文系が折衷したもの 第6図4は器形的には沈線文系であるが、頸部の間隔をおいた縦位平行沈線文の地文と、その下の半裁竹管沈線による幾何学的文様の地文に斜縄文が施文され、更に下には空白部を持つ結節縄文と「Y」字状文が見られ、明らかに両要素が折衷している。また、口縁部の瓦状押引文、胸部の幾何学的文様に渦巻状モチーフが崩れたと考えられるものが使われている点、古い要素が残存したと考えてよいのだろうか。なお、この資料と同じく頸部に間隔をおいた平行沈線文の地文に縄文が施文されるものとして拓13・14・17がある。第7図16は、器形と口縁部から頸部までの文様は沈線文系II段階であるが、頸部以下は結節を伴うLR^{RE}の縄文が縦位に空白部をもつ形で施文されており縄文系I段階の様相を呈す。この資料のように胸部の縄文に反捺の原体が見られるものとして



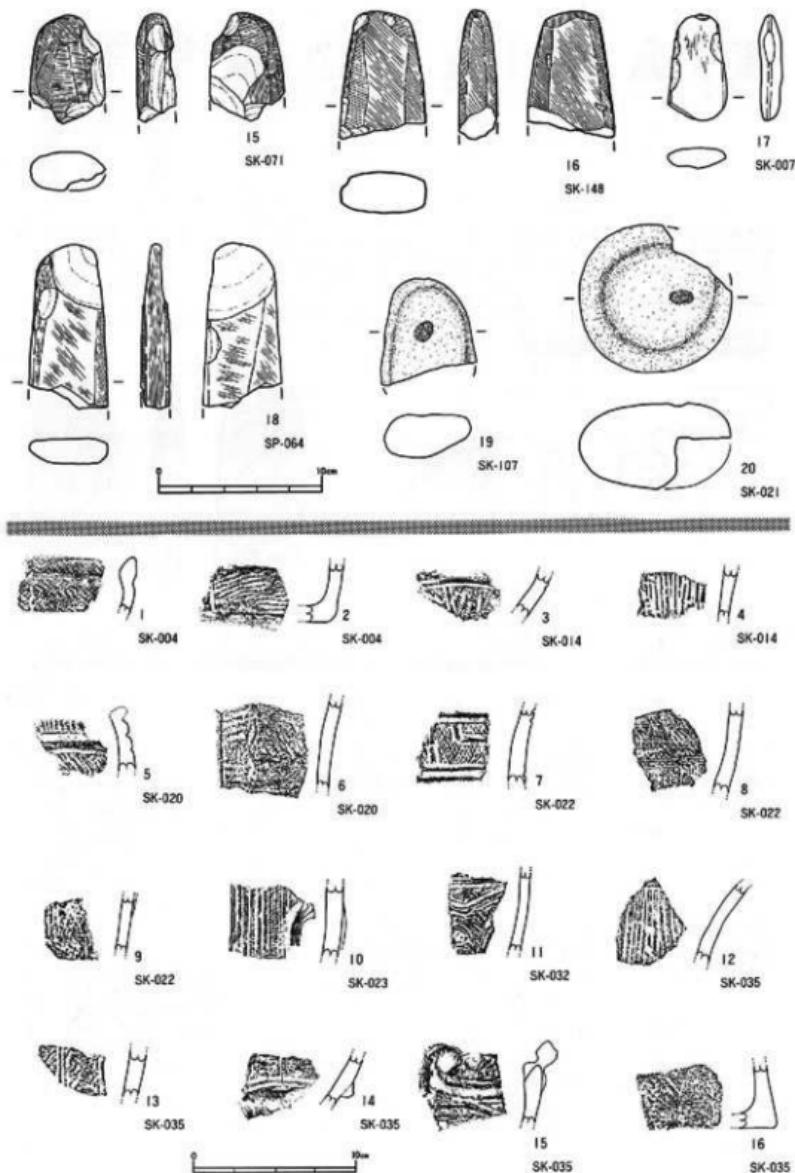
第6図 出土土器実測図(1)



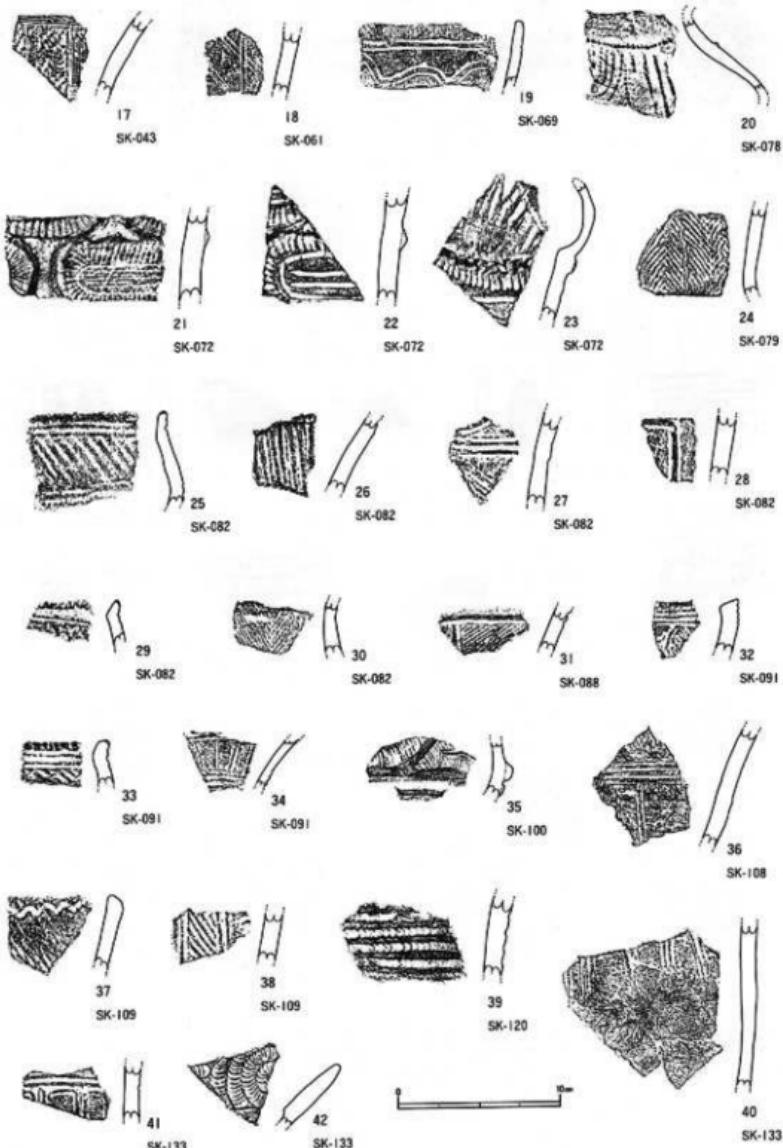
第7図 出土土器火焔区(2)



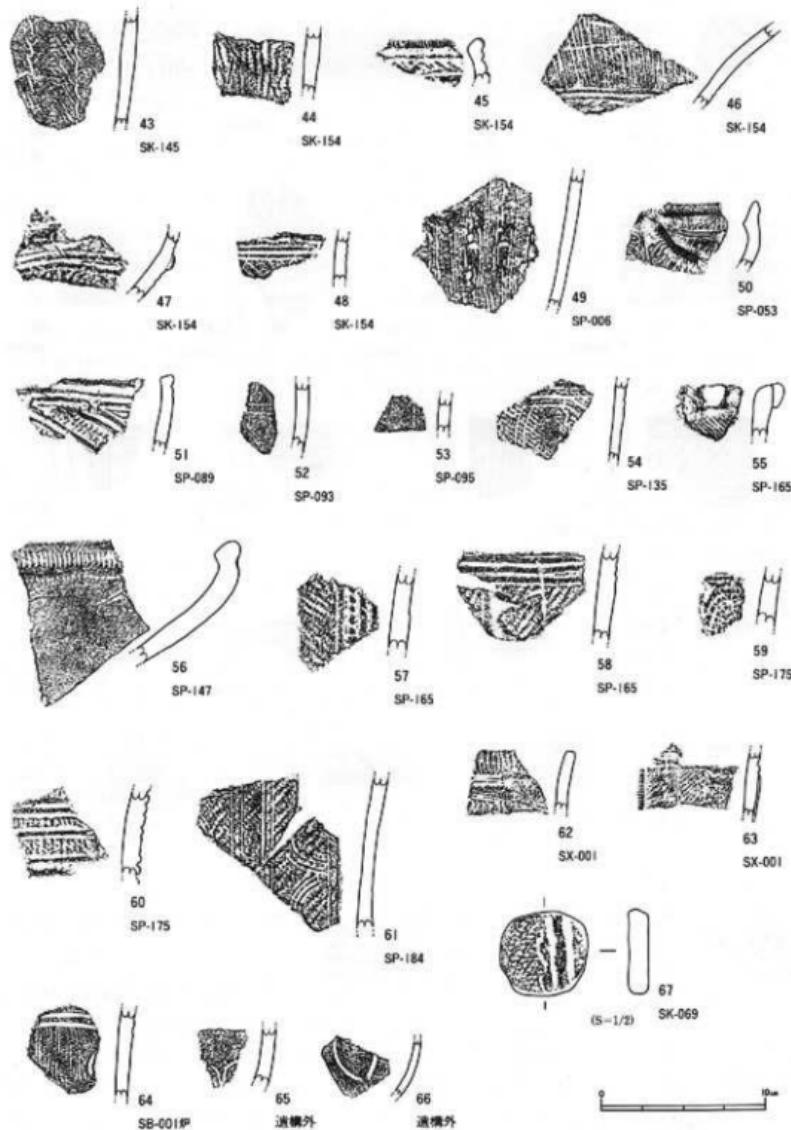
第8図 出土石器実測図(I)



第9図 出土石器実測図(2)・出土土器拓影(1)



第10圖 出土土器拓影(2)



第11図 出土土器拓影(3)

松本市林山越遺跡、同向畠遺跡出土の資料がある。

外来系 拓49・64には撚糸文が見られ北陸系の土器と考えられる。特に拓49は、胎土が明らかに在地の土器と異なり搬入品と見てもよいのではないかと思われる。また拓7も北陸の要素が見られる。

① 繩文時代中期中葉

第6図1は、口縁部に隆帯によって区画された中を蓮華文によって充填する文様が見られ、胸部の横走する隆帯までの間にはパネル文も見られる。それ以下には指頭圧痕文が多用されており、器形の上部は北陸の要素、下部は東信地方の斜行沈線文土器の要素によって装飾された土器と言えよう。15の口縁部の特殊な突起、29に見られる区画文脇の貼付文も斜行沈線文土器であろう。2は繩文が施された上に連鎖状隆帯の見られるもので、3は同一個体かと思われるが指頭圧痕文も見られる。松本平で僅かに見られる資料であるが新道式期と思われる。17は口縁が4単位の波状口縁となり、口縁端部を肥厚させ胸部に全面繩文施文されているが藤内II式になると思われる。拓40は平出III類Aの胸部破片と思われるが明確な時期は分からぬ。その他として、連続角押文がみられる20・22・24・拓19は落沢式、押引爪形文の見られる新道式の23・25・26、藤内式の6・7・18・19、拓21～23、井戸尻式の11・12があるが特筆すべきものはない。

② 繩文時代中期後葉

曾利I式の27、曾利II式の8、曾利IV式の13が該当するのみで、量は少ない。

③ 繩文時代後期

甕被葬墓のSK-031より出土した5と、達構外から出土した磨消繩文が見られる拓66がある。5は口縁部に2単位の突起があるのみで文様も見られないため時期を決定していないが、後期を中心に甕被葬墓が見られることからこの時期とした。

④ 弥生時代後期

30のみで、内外面とも丁寧なミガキが施され外側の一部に朱が認められる。箱清水式だろう。

II 石 器（第8、9図）

石鏃3点、石錐1点、石匙1点、打製石斧6点、磨製石斧4点、小型磨製石斧3点、凹石2点が出土した。第8図3の石鏃には柄に固定するために使われたと思われる付着物が認められた。

3 ま と め

今回の調査は280m²という小規模な調査であったが、住居址1、土壤・ビットあわせて378基が発見され、まさしく足の踏み場もないという状況だった。

SK-031の甕被葬墓は山形村では初めての発見であるのに加え、松本平を見ても塙尻市御堂垣外遺跡、波田町草原遺跡、明科町北村遺跡等に類例が求められるだけで貴重な発見であった。調査で一番多く発見された繩文時代中期初頭の土器に関しては、撚糸文のついた北陸系の搬入品と考えられる土器片や、大歳山式という畿内系の土器片が発見され、当時から山向こうの人々と交流が行われたことを裏付ける資料であり興味深い。また在地の土器に関しては、松本平で多く発見される資料ではなく今後この時期の研究を進めるのに不可欠な資料だと思われる。これに続く時期の資料としてSK-007から発見された土器（第6図1）があるが、上半が北陸系、下半が東信の斜行沈線文土器系であり、同一器面上に両要素

が表現されたあまり類例のないものと思われる。

淀の内遺跡は今まで縄文時代中期中葉から後葉の資料が大半を占めていたが、今回は中期初頭の土壙群が発見され、今後の調査によって遺跡のどの場所に当該時期の住居址が発見されるのか非常に興味深い。また、調査前の段階で推測されていた環状集落の北側の発見と集落構造の解明は、今後の調査における課題である。

中町立道西遺跡 第1次調査試掘

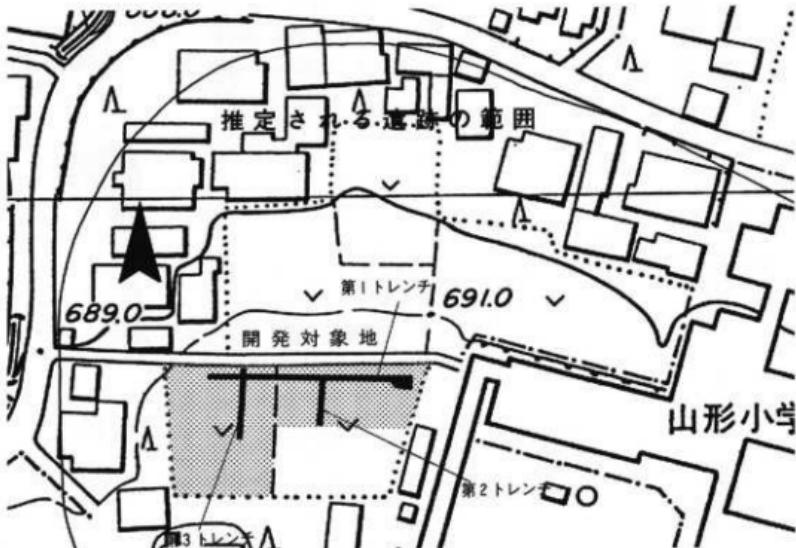
対象地	長野県東筑摩郡山形村3834-7他16筆
調査期間	平成9年8月25日～平成9年8月29日
開発対象面積	1,278m ²
発掘面積	42m ²
調査原因	民間宅地開発4区画及びこれに伴う進入路の設置

1はじめに

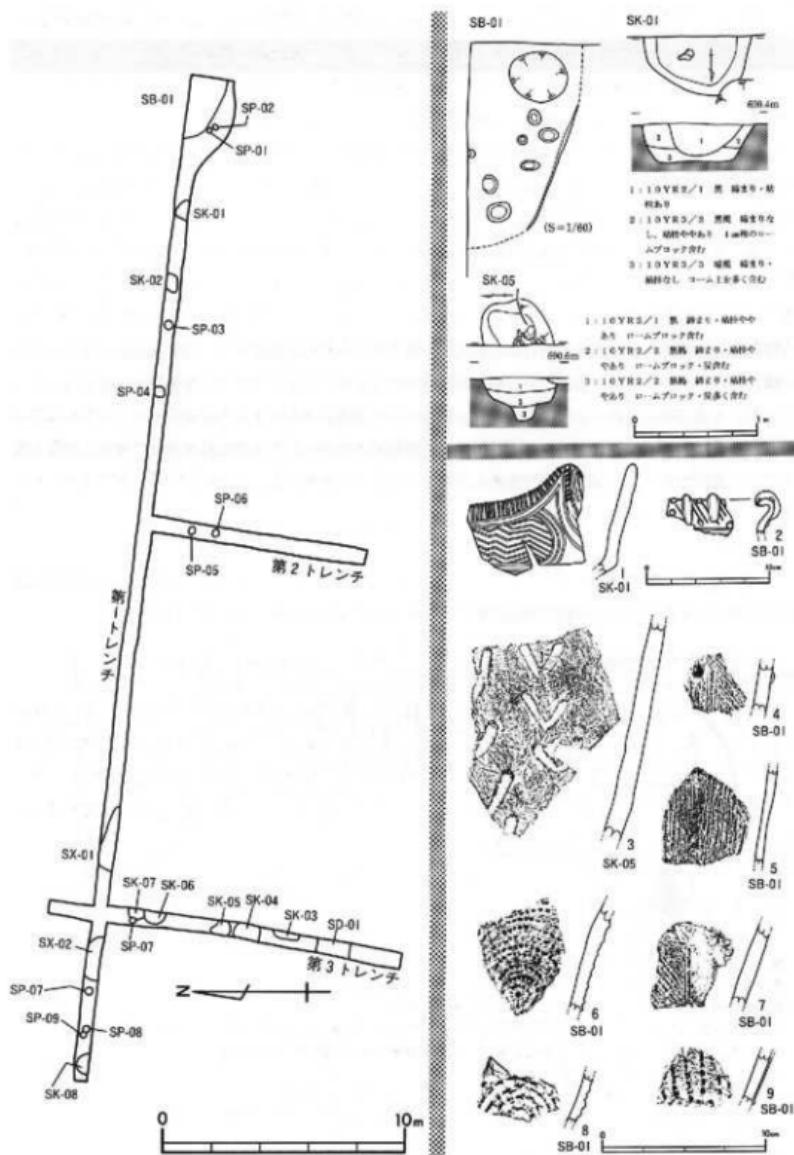
中町立道西遺跡は三間沢川と鳴音川の間に取り残された台地上に位置する。現在は山形小学校の敷地がほぼ覆い、西は下大池公民館に至る範囲に遺跡が推定されている。今までに学術的な調査は行っていないが、大正13年に山形小学校校舎建築のとき弥生時代後期の甕が出土、小学校のどこであるかは不確かだが弥生時代中期の甕が出土、この付近から八棱鏡が3面出土したと言われており、昔から注目を集めていた遺跡である。この度小学校敷地に西接する場所で宅地開発が計画されたため、試掘調査を行い埋蔵文化財の有無を確認することとした。

2調査の結果

調査地は、東側で50cm、西側で30cmの耕作土を除去するとローム層に至るが、調査地の西端には一部



第12図 中町立道西遺跡位置図 (S=1/1,000)



第13図 調査区全体図・遺構図・土器実測図・折影

ローム混じりの黄褐色砂礫層が見られ、ローム堆積後に鳴音川がつくりだした扇状地砂礫層の堆積が一部及んだものと考えられる。調査は東西方向に第1トレンチ、南北方向に第2・3トレンチと計3本設け実施した。竪穴式住居址1、土壙10、ピット9、溝址1が検出された。

● SB-01

第1トレンチの東端で検出された。住居址はかなり削平されており、最も残存状況が良い場所でも壁高7cmしかなかった。床はロームを掘り込みそのまま床面としているが踏み締められた痕跡もなく軟弱であった。南側を拡張したが炉址は検出されず、ピットは7基検出されたが、最も深いもので20cm程度である。覆土中から縄文時代前期末の土器（第13図2・4～9）が出土した。2は口縁部に貝殻状貼付文が見られる諸磯C式の土器である。4・5・7は集合条線が施され、4にはボタン状貼付文も見られる。6・8は集合条線の上に結節浮線文が渦巻状に配され、9は集合条線の上に結節浮線文が棒状に貼付されている。これらの特徴から下島式期に帰属すると考えられる。

● SK-01

第1トレンチの東側、SB-01の2m西に位置する。東西88cm、深さ31cmを計るが南側は調査区域外におよぶ。覆土は3層に分けることができたが、底から15cm程浮いた状況で縄文時代中期初頭の土器（第13図1）が出土した。口縁端部にソーメン状の細い貼付文が見られることから、中期初頭でも古い要素をもつ土器である。

● SK-05

第3トレンチの中央に位置する。南北で58cm、深さ34cmを計るが、西側は調査区域外に及び南側は攢乱されている。覆土中から縄文時代中期末曾利V式の土器（第13図3）が出土した。

3 まとめ

今回の試掘調査では調査区の全域から遺構が検出され、第1トレンチ東側と第3トレンチでは密な状況であった。第1トレンチ東端では縄文時代前期末の住居址が検出され、山形村では下竹田唐沢遺跡につく発見があり、また第3トレンチでは少量ながら中世の遺物が出土する遺構（SX-01、SK-06・07・08、SD-01）が検出された。よって試掘調査の結果、宅地開発にあたっては埋蔵文化財の保護対策が必要であると判断された。

一参考文献

- 赤塙仁・三上徹也 1994 「下島式・晴ヶ峯式の再提唱とその意義」『中部高地の考古学IV』
- 縄文セミナーの会 1987 「第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相」
- 寺内隆夫 1996 「斜行沈線文を多用する土器群の研究」『長野県の考古学』
- 長野県史刊行会 1988 「長野県史 考古資料編」全一巻（四）
- 長野県埋蔵文化財センター 1987 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1」
- 長野県埋蔵文化財センター 1988 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2」
- 松本市教育委員会 1989 「松本市向畠遺跡II」
- 三上徹也 1987 「梨久保式土器 再考」『長野県埋蔵文化財センター 紀要1』
- 山形村教育委員会 1971 「長野県東筑摩郡山形村唐沢・洞遺跡 緊急発掘調査報告書」
- 山形村教育委員会 1987 「殿村遺跡」
- 山形村教育委員会 1997 「淀の内遺跡」

洞遺跡 第3次調査（試掘）

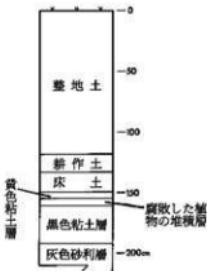
対象地	長野県東筑摩郡山形村23番地1・3
調査期間	平成9年10月13日・14日
開発対象面積	477m ²
発掘面積	25m ²
調査原因	個人宅地開発

1はじめに

遺跡の南方200mの山麓沿いにある湧水から流れ出る小河川沿いに立地し、北方へ緩やかに傾斜している。昭和45年に行われた第1次調査では、縄文時代中期の住居址が21基、平安時代の住居址が4基、弥生時代の埋甕が発見され当時としては多大な成果を得た調査として知られている。また平成7年に第2次調査（試掘）が行われ、再度縄文時代中期の集落跡であることが確認されたが、両調査とも調査面積が小さく集落の構造を解明するにはいたっていない。

2 調査の概要とまとめ

開発対象地は元々水田であったが仮置きの土砂が1mほど堆積しており、トレーナーを1本設定するにとどめた。この1mの堆積土を除去すると水田面が現れ、水田耕作土を除去すると水生植物が腐敗したと考えられる堆積が10cm程あり、その下には30cm程黒色粘土が堆積していた。水田になる前は湿地帯になっていたと考えられる。またその下には灰色の砂利層が堆積していたが、深さが2mに至ったため作業の安全を考えこれまで以上の掘削を断念した。なお遺物の出土はなかった。以上から当地における埋蔵文化財保護対策は必要ないと判断された。



第15図 基本層序



第14図 洞遺跡第3次調査位置図 (S=1/2,500)

下耕地遺跡 第2次調查（試掘）

対象地 長野県東筑摩郡山形村482番地、484番地1
 調査期間 平成9年10月8日～平成9年10月13日
 開発対象面積 2,103m²
 発掘面積 45m²
 調査原因 民間宅地開発8区画

1 はじめに

下耕地遺跡は、縄文時代中期の集落址が発見されている淀の内遺跡・洞遺跡に挟まれる位置にある。平成8年に小規模な第1次調査が実施され、縄文時代中期と平安時代の竪穴式住居址が各々1基づつ検出されているが、遺跡の範囲・構造などは判明していない。

2 調査の概要とまとめ

開発対象地は、上大池区洞地籍から流れ出る小河川がつくりだした谷状地形内に位置し、現在も小さな農業用水が対象地に西接する位置を流れている。試掘調査前から集落址の検出は予想されなかっただが、水辺利用の痕跡が見られないかを念頭に調査を進めた。対象地は現地表面から1m迄は圃場整備前と後の耕作土が堆積しているが、それ以下は砂や砂利層が見られ河道になった様子が伺えた。この砂利層には、上流の洞跡から流れ込んだと思われる遺物が見られた。以上から、宅地開発における埋蔵文化財への影響は甚だ軽微と判断されたため埋蔵文化財保護対策は求めなかった。



第17図 基本層序



第16図 下耕地遺跡第2次調査位置図 (S=1/2,500)

図版1 淀の内遺跡第2次調査(1)



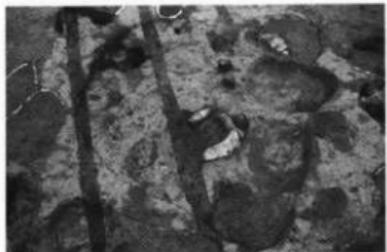
調査前全景（北から）



遺構検出状況（北東から）



遺構検出状況（南西から）



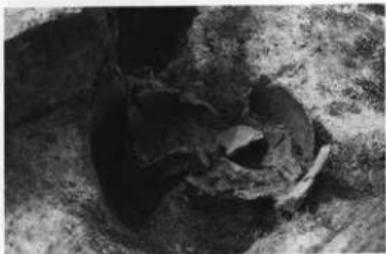
SB-001 (北から)



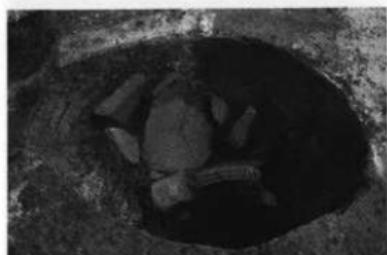
SP-100 (西から)



SK-007 (西から)



SP-073 (東から)



SP-064 (西から)



SK-031 (東から)



SK-150 (西から)



SK-107 (東から)



SK-022 (東から)



SP-165 (西から)



SB-001 炉 (東から)



SK-145 (東から)



SK-028 (南から)



SK-011 (西から)



窯 摘 (北東から)



作菜風景

図版 4 淀の内遺跡第2次調査 出土遺物



SK-150出土 磨石接合資料



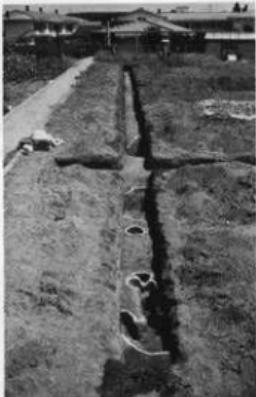
調査前全景 (西から)



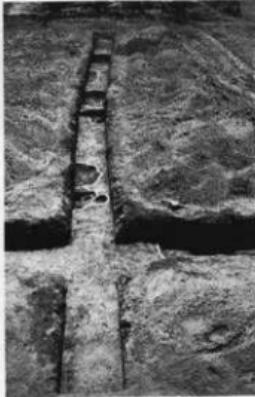
SB-01 (西から)



第1トレンチ (西から)



第2トレンチ (北から)



第3トレンチ (北から)

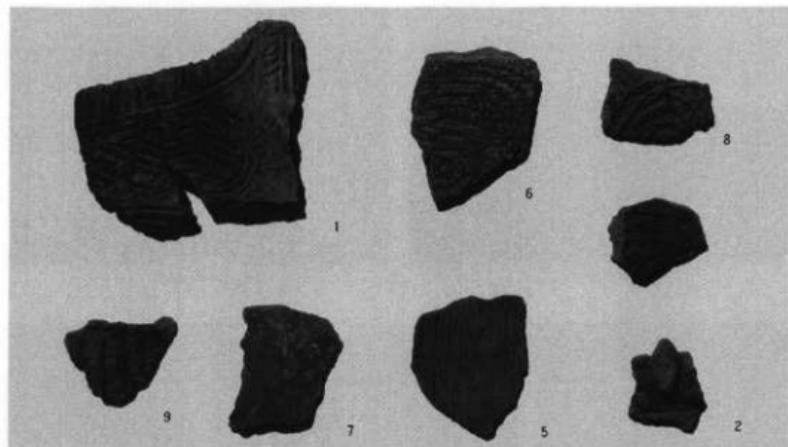


SK-01 (西から)



SK-04 (北から)

図版 6 中町立道西遺跡出土遺物・下耕地2次・洞3次



中町立道西遺跡出土土器



下耕地2次 全景(北から)



洞3次 調査前全景(南から)



洞3次 トレンチ全景(西から)



洞3次 基本層序

報告書抄録

ふりがな	やまがたむらまいぞうぶんかざいちょうさねんぼう（へいせいりねんどっこほじょじぎょう）
書名	山形村埋蔵文化財調査年報（平成9年度 国庫補助事業）
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	和田 和哉
編集機関	山形村教育委員会
所在地	〒390-1301 長野県東筑摩郡山形村 2040-1 Tel 0263-98-3155
発行年月日	1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よどのうち 淀の内	468番地1		3	137° 52' 43"	36° 9' 4"	970901 ~ 971008	280m ²	個人宅地 開発に伴う 記録保存
なかまちた ちみちにし 中町立道西	3834番地7 他16筆	204501	15	137° 52' 35"	36° 9' 54"	970825 ~ 970829	42m ²	民間 宅地開発 に伴う試掘
ほら 洞	23番地1 23番地2		2	137° 52' 39"	36° 8' 52"	971013 ~ 971014	25m ²	個人 宅地開発 に伴う試掘
しもこうち 下耕地	482番地 484番地1		3	137° 52' 40"	36° 8' 55"	971008 ~ 971013	45m ²	民間 宅地開発 に伴う試掘
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
淀の内	集落址	縄文中期	堅穴式住居址 土壤 ビット 1 157 221	縄文中期初頭の土器 縄文後期斐被葬墓の焼鉢	<ul style="list-style-type: none"> ・縄文中期初頭土器の出土 北陸系搬入品や畿内系（大歳山式）出土 ・斐被葬墓の検出 			
中町立道西	集落址	縄文前期末 中世	堅穴式住居址 土壤 1 10	縄文前期末土器	<ul style="list-style-type: none"> ・縄文前期末（下島式）の住居 址検出 			
洞	集落址	縄文中期						
下耕地	集落址	縄文中期						

山形村埋蔵文化財調査年報

（平成9年度 国庫補助事業）

平成10年3月25日 印刷

平成10年3月31日 発行

編集・発行 山形村教育委員会

印刷・製本 もえぎ企画書籍